第４分科会

四日市市文化会館

第１ホール



第４分科会

会 場　四日市市文化会館　第１ホール

発表テーマと発表PTA

◆Ｈｉアプリで広がる・つながるPTA活動の輪
～「できるときに、できることを」を形にしたエントリー制の実践～

／名古屋市立中根小学校PTA

◆つながる絵本プロジェクトで、つながる校区、つながる地域

／三重県四日市市立南中学校PTA

助　言　者

●四日市市立中部中学校　校長　坂下　亮介
●四日市市教育委員会　教育指導課　副参事兼課長補佐　重内　庸司

講　　演

◆子どもに安心を届ける　～不登校を予防する言葉かけ～

講 演 講 師

●ちばＴラボ代表、元北海道公立中学校教諭　千葉　孝司

Ｈｉアプリで広がる・つながるＰＴＡ活動の輪
～「できるときに、できることを」を形にしたエントリー制の実践 ～

愛知県名古屋市立中根小学校ＰＴＡ
顧　問　　會　澤　啓　子

１　はじめに

私は、令和５年度にＰＴＡ本部役員となり、運営に携わって４年目を迎えました。この４年間、会長とともに「お願いするＰＴＡ」から「参加しやすいＰＴＡ」への運営改革に取り組んできました。

本部役員になるまでは、本部は「特別な人が入る場所」だと思っていました。当時は、委員を１年経験した人だけが本部役員になれる仕組みだったため、自分には縁のない役割だと感じていたのです。一方、多くの保護者は、「子ども一人につき委員一回」という仕組みの中で、それぞれの生活に合わせながら委員を引き受ける時期を考えていました。私自身も、多くの保護者と同じ立場でした。

令和５年度から、本部役員のなり手不足をきっかけに会則が改正され、委員経験がなくても本部役員になれることとなり、当時、読み聞かせボランティアとして学校に関わっていた私に本部役員のお声掛けをいただき、活動を始めました。

本部役員として活動を始めると、ＰＴＡパトロールや行事の準備、委員会の運営があり、想像以上に多くの業務を担っていることを知りました。特に毎年行われる委員選出は、本部役員、保護者にとって大きな負担となり、運営に追われる中で改革を考える時間さえ持てない状況でした。

そこで中根小ＰＴＡでは、委員会活動の見直しから段階的な運営改革を進め、その取組の一つとしてＨｉアプリを活用したエントリー制を導入しました。本稿ではＨｉアプリ導入に至るまでの運営改革の歩みと、エントリー制導入による実践と成果について報告します。

２　改革への土台づくり

「参加したくても参加しづらいＰＴＡを変えたい。」その思いだけで改革を進めることはできませんでした。まず必要だったのは、本部役員の負担を整理し、運営を見直すことでした。本部役員は、本部活動に加え、３つの委員会運営と委員管理を担っていました。特に毎年行われる委員選出は、多くの時間と労力を要し、本部役員にとって大きな負担となっていました。（図１）



図１

そこで、まず委員会活動を見直し、活動の廃止や統合など、できることから段階的に運営改革を進めました。（図２）



図２

改革を進める中、何度も教頭先生に相談しました。「ＰＴＡ活動に携わる方々が楽になる改革になっているか」「これまで委員を引き受けてくださった方はどう思うだろうか」と問い掛けられ、そのたびに立ち止まり、話し合いを重ねました。

その結果、改革には制度を変えることだけではなく、学校との信頼関係を築き、目的を保護者と共有しながら進めることが大切であると学びました。委員会活動を見直したことで、本部役員と保護者の負担は軽減されました。しかし、この時点では活動を整理した段階であり、ＰＴＡの仕組みそのものを変えるまでには至っていませんでした。

３　視察をきっかけに見えた新たな可能性

委員会活動を見直したことで一定の負担軽減は図ることができました。しかし、「このままで本当に良いのだろうか」という思いは残っていました。

本部の任期が残り半年となった頃、同期である会長から「他校の取組を見に行ってみよう。」と声を掛けられ、エントリー制を導入している学校を視察しました。視察先のＰＴＡの雰囲気はとても明るく、前向きな印象でした。エントリー制を導入してから、「保護者間の委員決めのストレスがなくなった」「今まで通りではなく、集まった人でできる活動を行えばよい」という話を伺い、保護者だけでなく、本部役員にとっても負担の少ない運営が実現できることを知りました。

そして、すぐに教頭先生に相談しました。しかし、中根小にはアプリの問題点がありました。保護者用連絡アプリ「きずなネット」はあるものの、エントリーに活用できるシステムがなく、新たな導入も費用面から難しい状況でした。

そんな中、会長から紹介されたのが、東京のＰＴＡ会員が開発した無料アプリ「Ｈｉアプリ」でした。募集や連絡機能を備えたこのアプリなら、工夫次第でエントリー制を実現できると考え、学校と何度も協議を重ねました。その結果、「導入するのであれば、最後まで責任を持って進められる人が中心となること」という方向性となり、会長とともに３年目も本部に残り、改革を進めていくことを決意し、ここからエントリー制導入へ新たな挑戦が始まりました。

４　エントリー制導入に向けた準備

令和７年度からエントリー制を導入するにあたり、最初に大切にしたことは、保護者の理解を得ることでした。教頭先生の協力をいただき、「きずなネット」を活用して保護者アンケートを実施した結果、８ 割以上の世帯

がエントリー制への移行を希望していることが分かりました。その結果を踏まえ、令和７年度は段階的にエントリー制を導入することとしました。（図２）

令和６年度内に保護者へ周知をするため、委員会の変更や活動内容をまとめたパンフレットを全世帯へ配布し、新１年生保護者説明会でも説明を行いました。（図３）



図３

そこで伝えたかったのは、「参加できる時だけ参加してください」ということだけではありません。「活動に参加できなくても、ＰＴＡへ加入し、エントリー制を支えていただくことも大切な協力です。」と、それぞれの生活に合わせて、無理のない形でＰＴＡとつながってほしいという思いを伝えました。

さらに、アプリ登録を簡単にしてもらえるように本校ＰＴＡ独自のＨｉアプリマニュアルを作成し、全世帯へ配布しました。（図４）



図４

こうして、保護者とＰＴＡが同じ方向を向いた状態で、令和７年度のエントリー制がスタートできる運びとなりました。

５　エントリー制導入後の実践と成果

新しいエントリー制を取り入れ令和７年度、Ｈｉアプリへの登録者数は順調に進み、４月末には１００人を超えることができました。

最初の募集となった足型マーク補修活動はすぐに定員を満たすこととなり、その後も子どもたちを支える大切な学校行事の活動も無事にエントリー制で実施することができました。

エントリー制活動を継続していくためには、募集を行うだけでなく、活動の様子を伝え続けることも大切です。そこで、全世帯に「きずなネット」より配信される「広報なかね」を活用し、ＰＴＡ活動の紹介や募集案内を継続して発信しました。

また、中根小オリジナルキャラクターによる四コマ漫画やイラストを掲載し、まだＨｉアプリに登録していない保護者へ「まず読んでもらう」広報を心掛けました。（図５）

さらにＨｉアプリのポイント機能を活用し、登録者数を増やすため期間限定登録ポイントを設け、活動に協力してくださる保護者に感謝の気持ちをポイント付与という形で伝え、これまで委員会活動に充てていた予算をポイントに振り替えることで、新たな予算を増やすことなく継続できる仕組みを整えていきました。

一年間の運営を学校とともに振り返った結果、３つの委員会のうちの分団代表委員会は置かなくても、運営できることを確認し、令和８年度から廃止が決まりました。（図２）

これにより、中根小ＰＴＡは残りの２つの委員会を統合した運営を行う本部のみとなり、「お願いするＰＴＡ」から改革を遂げることができました。

６　実践を振り返って

令和８年度を迎え、Ｈｉアプリ登録者数は２９０人となりました。エントリー制は定着しつつありますが、私はこれで完成したとは考えていません。毎年、新一年生が入学し、卒業生が巣立っていきます。だからこそ、本部役員は保護者が参加しやすい環境を考え続け、活動を発信し続けることが大切だと考えています。エントリー制は目的ではありません。保護者がそれぞれの生活を大切にしながら、無理なく学校とつながり続けるための仕組みの一つです。それぞれの学校には、それぞれの学校に合ったＰＴＡの形があります。大切なのは、「もっと良くできないか」という視点をもち、時代や保護者の状況に合わせて見直し続けることだと感じています。

そして、本部役員の負担が軽減されたことも、大きな成果でした。委員選出に追われるのではなく、保護者や子どもたちのために「こんなことをやってみたい」という思いを形にする明るい時間が生まれました。

それは、**「やらなくてはいけないこと」に追われるのではなく、「やりたいこと」を実現できるＰＴＡへ、**一歩近づけたことでもあります。

本部役員を支えることは、保護者を支えること。そして、その積み重ねが子どもたちを支えることにつながるのだと、この実践を通して感じました。

私たちも最初から答えをもっていたわけではありません。一歩ずつ活動を見直し、学校と話し合い、他校から学び、本部役員や保護者と試行錯誤を重ねながら、ここまで歩んできました。ＰＴＡ改革に必要なのは、特別な知識や経験ではありません。

「もっと良くしたい」という思いをもつこと。

その思いを受け止め、共に考え、決断してくれる人がいること。

そして、その思いを形にする仲間がいること。

これが、私自身４年間の実践でたどりついた答えです。

この実践が、同じようにＰＴＡ活動に取り組む皆さまにとって、それぞれの学校に合ったＰＴＡの在り方を考え、一歩踏み出すきっかけとなれば幸いです。



図５

つながる絵本プロジェクトで、つながる校区、つながる地域

三重県四日市市立南中学校ＰＴＡ
顧　問　　堀　　加　奈

１　はじめに

(1) 南中学校区の現状

四日市市の南部に位置する南中学校は、生徒数 600 名を超える、市内では最大規模の学校です。南中校区には 3 つの小学校があり、様々な家庭環境や地域性を有しています。南中 PTA は比較的積極的に活動に参画する保護者が多く、また、登校見守りボランティアや図書ボランティア(以下、図書ボラ)をはじめ、地域の方が熱心に学校に関わり支えてくださる土壌があります。こうした地域性の中で、わたしは、校区の一つである泊山小学校ＰＴＡ本部にて令和 3 年から 2 年間、現在は南中学校 PTA 本部役員として、活動を続けています。

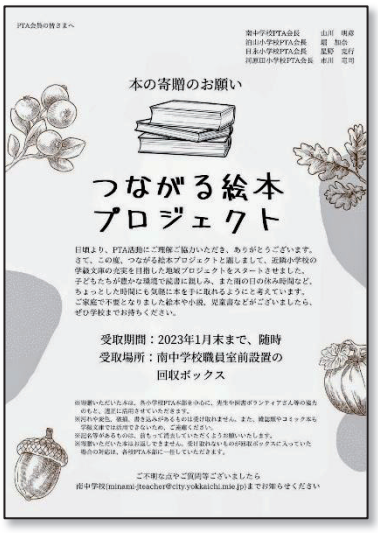
(2) 取り組みのきっかけ

ＰＴＡ会長という立場で、令和 3 年に小学校のコミュニティスクール運営協議会(以下、ＣＳ)に初めて参加するようになりました。当時のＣＳ会議は、地域の方々が学校を参観して、学校の課題や困り感を共有することが中心でした。そんな中でわたしが気になったのは、各教室前に雑然と置かれている古い学級文庫でした。「この本はいつからあるのだろう」「誰が管理しているのだろう」「本の入れ替えはあるのだろうか」そんな素朴な疑問が次々に浮かびました。そして何より「子どもたちが休み時間に自然と本を手に取る姿をみたい」という思いが芽生え、ＣＳの委員へ投げかけたことがこの「プロジェクト」の始まりでした。当初は自校の学級文庫の充実を目的とした本の寄贈を募る小さな提案でしたが、ここから学校・家庭・地域を巻き込む取り組みへと発展していくこととなりました。

２「つながる絵本プロジェクト」の実践

(1) 中学校区の連携体制

まず、小学校だけで寄贈を募った場合、高学年向けの本が十分に集まらないのではないかという課題がありました。学校長とも対話を重ねる中で、「中学校でも寄贈を募ることはできないだろうか」という案が出ました。一方で、「中学校で集まった本を一つの小学校だけで受け取るのは適切ではないのではないか」という新たな課題も生まれました。 そこで、南中学校区三つの小学校と南中学校、それぞれのＰＴＡへ声をかけ、中学校区全体で取り組むプロジェクトとして実施することを提案しました。学校を通じてＰＴＡ会長へ連絡を依頼したり、学校長とともに中学校を訪問したりと、何とか一学期中にスタートさせたい一心で準備を進めました。 6 月末、4 校の PTA 会長が初めてＳＮＳ上でつながり、様々な協議を重ね、その結果、7 月の個人懇談会に合わせて保護者へチラシを配布が実現。「つながる絵本プロジェクト」をスタートすることができました。4 校ＰＴＡの連名で全世帯に配布できたことは、一つの目的に向かって校区の PTA がつながり、協力体制を築くことができたことを実感する出来事となりました。


PTA会長の皆さまへ

本の寄贈のお願い

つながる絵本
プロジェクト

受取期間：2023年1月末まで、随時
受取場所：南中学校職員室前設置の
回収ボックス

ご不明な点やご質問等ございましたら
南中学校(minami-jteacher@city-yokkaichi.ed.jp)までお知らせください

(2) プロジェクトの経過

プロジェクトのネーミングから、寄贈本の扱いについての注意事項、回収ＢＯＸの設置場所、問い合わせ先など、たくさん協議を重ねてチラシが完成したわけですが、2 学期以降も懇談期間や運動会に合わせて経過報告や追加のチラシを配布するなど、工夫しました。また、4 校の名前の入った寄贈印を作成し、集まった本に押印する準備も整えました。日に日に集まる絵本や児童書を前に、この輪がどこまで広がるのだろうかとわくわくしました。ＣＳ会議でも経過を都度報告してきましたが、地域の方々が一緒になって喜んでくれたり、小中学生向きではない本の寄贈先の提案をしてもらったりと、お世話になりました。



(3) 図書ボランティアとの協働

そうやって続々と、我々の予想を遥かに上回る規模で本が集まったわけですが、ここで学級文庫に適した形に本を整える必要があることを知りました。図書室の本と混ざらないための工夫も必要でした。図書ボラさんの助けがなければ集めた大量の本をどうしていいかわからなかったと思います。寄贈印を押し、仕分けや修繕、必要なものにはカバーをかけてもらいました。集まった本はＰＴＡで保管しつつ、学級文庫で活用できるところまで手をかけてもらうのは、本の扱いに長けている各校の図書ボラさんに協力をお願いすることとなりました。普段は図書室で活動している図書ボラさんが、ＰＴＡ室で一緒になって仕分け作業をする姿は、団体の垣根を超えて協働する楽しさや、つながりのあたたかさを感じる機会となりました。

(4) 家庭・学校・地域とのつながり

4 校のＰＴＡが主催し、保護者や先生方、そして一部地域からも集まったたくさんの本は、各校の図書ボラさんの手と知恵を借りながら仕分けし、なんとか年度内に学級文庫で活用できる形となりました。いよいよ本を共有スペースに並べるとなった時には、学校の先生方もお手伝いをいただきました。先生方の中には、ご自身が読み終えたばかりの真新しい本を寄贈いただいたり、先生自身が読まれていた本をご実家からたくさん譲っていただいたりと、一緒になって取り組んでくださる方が本当にたくさんおられ、これこそが PTA 活動の本質ではないだろうかと改めて感じました。 また、集まった本の中で小中学生向きではない本は、ＣＳを介して地域の方からご助言をいただき、幼児向けの絵本は校区内の保育園へ、高校生や大人向けのものは人権プラザや地区市民センターの図書室、老人ホームなどにも寄贈させていただく運びとなりました。

(5) 実践から得られた成果と課題



年度末までに集まった寄贈本は、絵本や児童書を中心に 1,462 冊にのぼりました。寄贈本を学級文庫に並べる際に、次のようなメモ書きを印刷して添えることにしました。 「ここにある本は、保護者や先生、地域の方から寄贈（プレゼント）された本です。ぜひ皆さんで大切に読んでください。たくさんの本との素敵な出会いがあります

ように。」 本を手にした子どもたちが、その本の向こう側に保護者や先生、地域の方々の思いを感じてくれたらーそんな願いを込めて、このメッセージを添えました。学級文庫の充実という当初の目的を超え、「多くの人が子どもたちを見守り、応援している」という思いを届けることができたことが、この取組みの最大の成果であったと感じています。 多くの方の協力により、学級文庫の充実だけにとどまらず、学校・家庭・地域をつなぐ取り組みとして大きな成果を得ることができた一方で、毎年役員が入れ替わるＰＴＡが取り組みの主体となって活動を継続し、地域に定着させていくためには課題も見えてきました。各校のＰＴＡが毎年同じ体制や熱量で取り組めるとは限りません。4 校のＰＴＡ会長の間でも、「家庭読書の推進にもつながるため継続すべき」という意見がある一方で、「継続を前提とすると、引き継いだ役員の負担やプレッシャーにつながるのではないか」という意見もありました。また、短い期間で繰り返し寄贈を募っても十分な冊数が集まりにくいことも予想されました。「毎年実施すること」を目的とするのではなく、無理なく続けられる仕組みや役割分担を考えていく必要があると感じました。

３　新たなスタート（令和７年度）

(1) 新プロジェクトの概要

令和 4 年の取組みから 3 年、わたしは中学校 PTA で本部役員をしながら、小学校での図書ボラにも籍を置いていました。校区の子どもたちの読書推進のために、何か出来ることはないかと模索する一方で、つながる絵本プロジェクトをリスタートさせることについては慎重でした。前回の実践を通して、継続には仕組みづくりが不可欠なため、安易に再開すべきではないと感じていたのです。

4 校のＰＴＡが足並みを揃えて取り組めるか、図書ボラさんが負担感なく関わってくださるか、色々な点で不安がありました。そんな時、声をかけてくれたのは前回のプロジェクトで一緒に活動した日永小学校の会長や、地域活動でもお世話になっている図書ボラさんでした。「そろそろまた、やってみない？」という言葉に背中を押され、再び学校やＣＳ、各校のＰＴＡ会長、図書ボラの皆さんに連絡を取り、プロジェクトの概要を説明し、協力を仰ぎました。長い目で見て「続けられる仕組み」を意識した、新たなプロジェクトとしての再スタートです。

(2) 校区の連携の広がり

今回のプロジェクトでは、ＰＴＡと中学校図書ボラの連名でチラシを配布し、回収ＢＯＸの管理や寄贈冊数の集計などは各校ＰＴＡが担当しました。集まった本は一度すべて中学校へ集約し、図書ボラの皆さんに仕分けや修繕、カバーかけなどをお願いしました。前回は、まずＰＴＡが本を集め、その後になって図書ボラの皆さんへ協力をお願いする形でしたが、今回はプロジェクト開始当初からＰＴＡと図書ボラが全体を見通した上で役割分担して活動を進めることができました。前回の経験があったからこそ、自然と役割を分担しながら協力できる関係が築かれていたことを実感しました。

(3) 図書ボランティアの新たな可能性

改めて感じたことは、校区の図書ボラさんの本に対する知見の深さです。学校によって、読み聞かせ活動を専門にされているところもありますが、対象年齢ごとに「これは中学生向き」「これは低学年向き」と、テキパキと仕分け作業をされ、本の修繕やカバーかけなども丁寧にやってくださいました。学校や保護者とのやり取りは PTA を主体に、本の扱いに関しては図書ボラさんに、それぞれの分野を生かした役割分担が

できたことで、より無理なく活動を進めることができたと感じています。 また、ＰＴＡは単年で人が変わっていきますが、図書ボラは長く続けている方が多く、ノウハウが引き継がれやすい面もあります。

(4) 保護者・地域の反応

２度目の取り組みで集まった本は、864 冊になりました。職員室前に設置された回収ＢＯＸに徐々に本が増えていく様子を、学校を訪れるたびに楽しみにしてくださった保護者さんや地域の方も多くおられました。わたしが本を回収に行った際にも、たくさんの先生方にお声をかけていただき、いつも嬉しい気持ちになりました。学校や地域、保護者が、この取組みを通して３年ぶりに再びつながり直した、そんな手応えを感じることができました。

4　おわりに

(1) 二度の実践から見えてきた課題

二度の実践を通して、子どもたちの読書環境のために、多くの保護者や先生方、地域の方々が快く協力してくださることが分かりました。一方で、継続的な活動として定着させるためには、毎年役員が交代するＰＴＡだけに負担が集中しない仕組みづくりが不可欠であることも見えてきました。また、本の仕分けや修繕には図書ボラの専門性が欠かせず、学校・ＰＴＡ・図書ボラ・ＣＳがそれぞれの役割を理解しながら協力することの重要性を改めて実感しました。「人の熱意」に支えられる活動は大きな力になりますが、それだけでは長く続けることは難しく、誰か一人に負担が偏らない体制づくりが今後の課題であると考えています。

(2) 持続可能な取り組みにするために

この取り組みは、学校・家庭・地域が子どもたちを思い、それぞれの立場でできることを持ち寄ることで、多くの人がつながるきっかけとなるものでした。毎年実施することにこだわるのではなく、その時々のＰＴＡや学校、地域の状況に合わせながら、無理なく続けられる形を今後も模索していきたいと考えています。 また、図書ボラや CS など地域に根付く活動とも連携しながら、「子どもたちのために何かしたい」という思いを次の世代へつないでいける仕組みづくりを目指していきたいと思います。持続可能な取り組みとは、毎年同じ形で続けることではなく、「そろそろまたやらない？」と自然に声を掛け合える人とのつながりを育んでいくことなのではないかと感じています。

(3) 絵本の先にある「つながり」を目指して

「つながる絵本プロジェクト」という名前だけを聞くと、多くの人は「絵本が次の子どもへ受け継がれるプロジェクト」を思い浮かべるかもしれません。しかし、私たちが目指した「つながる」とは、それだけではありません。子どもたちの周りには、保護者や先生、地域の方々など、多くの大人が応援していることを伝えたい。その思いを絵本という形に乗せて届けることが、この取り組みの本当の目的になりました。学校・家庭・地域がゆるやかにつながり続けることは、地域全体で子どもたちを見守り、育てていくことにつながります。そして、そのようなつながりは、学校へ毎日通う子どもだけでなく、さまざまな事情を抱える子どもたちにとっても、「地域には自分を気にかけてくれる人がいる」と感じられる安心感につながるのではないかと思います。一冊の絵本から始まった小さな取り組みが、人と人とのつながりを育み、誰もが居心地のよさを感じられる地域づくりへと広がっていくことを願っています。